

# 山椒大夫

森鷗外

青空文庫



越後えちごの春日かすがを経て今津へ出る道を、珍らしい旅人の一群れが歩いてゐる。母は三十歳を踰こえたばかりの女で、二人の子供を連れこている。姉は十四、弟は十二である。それに四十ぐらいの女中が一人ついて、くたびれた同はらから胞二人を、「もうじきにお宿にお着きなさいます」と言つて励まして歩かせようとする。二人の中で、姉娘は足を引きずるようにして歩いてゐるが、それでも気が勝つていて、疲れたのを母や弟に知らせまいとして、折り折り思い出したように弾力のある歩きつきをして見せる。近い道を物もの詣りまいにでも歩くのなら、ふさわしくも見えそうな一群れであるが、笠かさやら杖つえやらかいがいしい出立いでたちをしてゐるのが、誰の目にも珍ら

しく、また気の毒に感ぜられるのである。

道は百姓家の断たえたり続いたりする間を通っている。砂や小石は多いが、秋あき日和びよりによく乾いて、しかも粘土がまじっているために、よく固まっています、海のそばのようにくるぶし踝を埋めて人を悩ますことはない。

藁わら葺ぶきの家が何軒も立ち並んだ一構はえが柞はの林はに囲まれて、それに夕日がかつとさしているところに通りがかった。

「まああの美しい紅もみじ葉をごらん」と、先に立っていた母が指さして子供に言った。

子供は母の指さす方を見たが、なんとも言わぬので、女中が言った。「木の葉があんなに染まるのでございますから、朝晩お寒

くなりましたしたのも無理はございませんね」

姉娘が突然弟を顧みて言った。「早くお父うさまのいらつしやるところへ往ゆきたいわね」

「姉えさん。まだなかなか往いかれはしないよ」弟は賢さかしげに答え  
た。

母が諭さとすように言った。「そうですね。今まで越こして来たよ  
うな山をたくさん越して、河や海をお船でたびたび渡らなくては  
往いかれないのだよ。毎日精出しておとなしく歩かなくては」

「でも早く往いきたいのですもの」と、姉娘は言った。

一群れはしばらく黙もくって歩いた。

向うから空から桶おけを担かついで来る女がある。塩浜から帰しる潮汲おくみ女

である。

それに女中が声をかけた。「もしもし。この辺に旅の宿をする家はありますか」

潮汲み女は足を駐<sup>と</sup>めて、主従四人の群れを見渡した。そしてこう言った。「まあ、お気の毒な。あいにくなところで日が暮れますね。この土地には旅の人を留めて上げる所は一軒もありません」女中が言った。「それは本当ですか。どうしてそんなに人気が悪いのでしょうか」

二人の子供は、はずんで来る対話の調子を気にして、潮汲み女のそばへ寄ったので、女中と三人で女を取り巻いた形になった。潮汲み女は言った。「いいえ。信者が多くて人気のいい土地で

すが、くにのかみ 国守おきての掟だからしかたがありません。もうあそこに

と言いさして、女は今来た道を指さした。「もうあそこに見えて  
いますが、あの橋までおいでなさると高たか札ふだが立っています。そ  
れにくわしく書いてあるようですが、近ごろ悪い人買いがこの辺  
を立ち廻ります。それで旅人に宿を貸して足を留めさせたものに  
はお咎とがめがあります。あたり七軒巻添えになるそうです」

「それは困りますね。子供衆もおいでなさるし、もうそう遠くま  
では行かれませんか。どうかしようはありますまいか」

「そうですね。わたしの通う塩浜のあるあたりまで、あなた方が  
おいでなさると、夜になってしましましょう。どうもそこらでい  
い所を見つけて、野宿をなさるよりほか、しかたがありますまい。

わたしの思案では、あそこの橋の下にお休みなさるがいいでしょう。岸の石垣にぴったり寄せて、河原に大きい材木がたくさん立ってあります。荒川の上から流して来た材木です。昼間はその下で子供が遊んでいます。奥の方には日もささず、暗くなっている所があります。そこなら風も通しますまい。わたしはこうして毎日通う塩浜の持ち主のところにあります。ついその柵の森の中ははそです。夜になったら、藁わらや薦こもを持って往つてあげましょう」

子供らの母は一人離れて立つて、この話を聞いていたが、このとき潮汲み女のそばに進み寄つて言った。「よい方に出逢であいましたのは、わたしどもの為合しあわせでございます。そこへ往つて休ませましょう。どうぞ藁や薦をお借り申しとうございます。せめて子供

たちにも敷かせたりきせたりいたしとうございます」

潮汲み女は受け合つて、柞の林の方へ歸つて行く。主従四人は橋のある方へ急いだ。

荒川にかけ渡したおうげのはし応化橋たもとの袂たもとに一群れは来た。潮汲み女の言つた通りに、新しい高札が立っている。書いてある国守の掟も、女の詞ことばにたがわない。

人買いが立ち廻るなら、その人買いの詮議せんぎをしたらよさそうなものである。旅人に足を留めさせまいとして、行き暮れたものを

路頭に迷わせるような掟を、国守はなぜ定めたものか。ふつつかな世話の焼きようである。しかし昔の人の目には掟である。子供らの母はただそういう掟のある土地に来合わせた運命をなげ歎くだけで、掟の善よし悪あしは思わない。

橋の袂に、河原へ洗濯に降りるものの通う道がある。そこから群れは河原に降りた。なるほど大層な材木が石垣に立てかけてある。一群れは石垣に沿うて材木の下へくぐってはいった。男の子は面白がって、先に立って勇んではいった。

奥深くもぐってはいると、ほらあな洞穴のようになった所がある。下には大きい材木が横になつていたので、床を張つたようである。

男の子が先に立って、横になつて居る材木の上に乗って、一番

隅すみへはいつて、「姉えさん、早くおいでなさい」と呼ぶ。

姉娘はおそろるおそろる弟のそばへ往つた。

「まあ、お待ち遊ばせ」と女中が言つて、背に負つていた包みをおろした。そして着換えの衣類を出して、子供を脇わきへ寄らせて、隅のところところに敷いた。そこへ親子をすわらせた。

母親がすわると、二人の子供が左右からすがりついた。岩代いわしろの信夫郡しのぶごおりの住家すみかを出て、親子はここまで来るうちに、家の中ではあつても、この材木の蔭より外らしい所に寝たことがある。不自由にも次第に慣れて、もうさほど苦にはしない。

女中の包みから出したのは衣類ばかりではない。用心に持つてゐる食べ物もある。女中はそれを親子の前に出して置いて言つた。

「ここでは焚火たきびをいたすことは出来ません。もし悪い人に見つけられてはならぬからでございませぬ。あの塩浜の持ち主とやらの家まで往つて、お湯をもらつてまいりませぬ。そして藁わらや薦こものことも頼んでまいりませぬ」

女中はまめまめしく出て行つた。子供は楽しげに おこしごめ やら、乾ほした果くだものやらを食べはじめた。

しばらくすると、この材木の蔭へ人のはいつて来る足音がした。  
「姥うばたけ竹かい」と母親が声をかけた。しかし心のうちには、柞ははその森まで往つて来たにしては、あまり早いと疑つた。姥竹というのは女中の名である。

はいつて来たのは四十歳ばかりの男である。骨組みのたくまし

い、筋肉が一つびとつ肌の上から数えられるほど、脂肪の少ない人、<sup>げぼり</sup>牙彫の人形のような顔に<sup>え</sup>笑みを<sup>たた</sup>湛えて、手に<sup>ずず</sup>数珠を持つてゐる。我が家を歩くような、慣れた歩きつきをして、親子のひそんでゐるところへ進み寄つた。そして親子の座席にしている材木の端に腰をかけた。

親子はただ驚いて見ている。<sup>あ</sup>仇をしそうな様子も見えぬので、恐ろしいとも思わぬのである。

男はこんなことを言う。「わしは山岡大夫という船乗りじゃ。このごろこの土地を人買いが立ち廻るといふので、国守が旅人に宿を貸すことを差し止めた。人買いをつかまえることは、国守の手に合わぬと見える。気の毒なは旅人じゃ。そこでわしは旅人を

救うてやろうと思ひ立つた。さいわいわしが家は街道かいどうを離れて  
いるので、こつそり人を留めても、誰に遠慮もいらぬ。わしは人  
の野宿をしそうな森の中や橋の下を尋ね廻つて、これまで大勢の  
人を連れて歸つた。見れば子供衆が菓子を食べていなさるが、そ  
んな物は腹の足しにはならないで、齒さわに障る。わしがところではさ  
したる饗もてなし応もてなしはせぬが、芋いも粥がゆでも進ぜましよう。どうぞ遠慮せ  
ずに来て下されい」男は強しいて誘うでもなく、独ひとりごと語ごとのように  
言つたのである。

子供の母はつくづく聞いていたが、世間の掟にそむいてまでも  
人を救おうというありがたい志に感ぜずにはいられなかつた。そ  
こでこう言つた。「承われれば殊勝なお心がけと存じます。貸すな

という掟のある宿を借りて、ひよつと宿主やどぬしに難儀をかけようかと、それが気がかりでございしますが、わたくしはともかくも、子供らに温ぬくいお粥かゆでも食べさせて、屋根の下に休ませることが出来ましたら、そのご恩はのちの世までも忘れませうまい」

山岡大夫はうなずいた。「さてさてよう物のわかるご婦人じや。そんならすぐに案内をして進ぜましよう」こう言つて立ちそうにした。

母親は氣の毒そうに言った。「どうぞ少しお待ち下さいませ。わたくしども三人がお世話になるさえ心苦しゅうございますのに、こんなことを申すのはいかがと存じますが、実は今一人連れがございます」

山岡大夫は耳をそばだてた。「連れがおありなさる。それは男おなごか女子おなごか」

「子供たちの世話をさせに連れて出た女中でございます。湯をもらうと申して、街道を三四町あとへ引き返してまいりました。もうほどなく帰ってまいりましょう」

「お女中かな。そんなら待つて進ぜましょう」山岡大夫の落ち着いた、底の知れぬような顔に、なぜか喜びの影が見えた。

ここは直江の浦である。日はまだ米よね山やまの背後うしろに隠れていて、

紺こんじよう 青あお のような海の上には薄うすい靄もやがかかっている。

一群れの客を舟に載せて纜ともづなを解といている船頭がある。船頭は山岡大夫で、客はゆうべ大夫の家に泊った主従四人の旅人である。

おうげのはし

応化橋の下で山岡大夫に出逢った母親と子供二人とは、女中

うばたけ

姥竹が欠け損じた瓶子へいしに湯をもらつて帰るのを待ち受けて、大

夫に連れられて宿を借りに往つた。姥竹は不安らしい顔をしながらついで行つた。大夫は街道を南へはいつた松林の中の草やの家に四人を留めて、芋いもがゆ粥がゆをすすめた。そしてどこからどこへ往く旅かと問うた。くたびれた子供らをさきへ寝させて、母は宿あるじの主人に身の上のおおよそを、かすかな燈ともしび火びのもとで話した。

自分は岩代いわしろのものである。夫が筑紫つくしへ往つて帰らぬので、二

人の子供を連れて尋ねに往く。姥竹は姉娘の生まれたときから守りをしてくれた女中で、身寄りのないものゆえ、遠い、覚束ない旅の伴ともをすることになったと話したのである。

さてここまでは来たが、筑紫の果てへ往くことを思えば、まだ家を出たばかりと言つてよい。これから陸おかを行つたものであろうか。または船路ふなじを行つたものであろうか。主人は船乗りであつてみれば、定めて遠国のことを知っているだろう。どうぞ教えてもらいたいと、子供らの母が頼んだ。

大夫は知れきつたことを問われたように、少しもためらわずに船路さかいを行くことを勧めた。陸を行けば、じき隣の越中の国に入る界さかいにさえ、親不知おやしらず子不知こしらずの難所がある。削り立てたような巖石の

裾すそには荒浪あらなみが打ち寄せる。旅人は横穴にはいって、波の引くのを待つていて、狭い巖石の下の道を走り抜ける。そのときは親子を顧うみみることが出来ず、子も親を顧うみみることが出来ない。それは海辺うみべの難所である。また山を越えると、踏ふまえた石が一つ揺ゆげば、千尋ちひろの谷底に落ちるような、あぶない岨そ道みちもある。西国へ往くまでには、どれほどの難所があるか知れない。それとは違って、船路は安全なものである。たしかな船頭にさえ頼めば、いながらにして百里でも千里でも行かれる。自分は西国まで往くことは出来ぬが、諸国の船頭を知っているから、船に載せて出て、西国へ往く舟に乗り換えさせることが出来る。あすの朝は早速船に載せて出ようと、大夫は事もなげに言った。

夜が明けかかると、大夫は主従四人をせき立てて家を出た。そのとき子供らの母は小さいふくろ囊から金を出して、宿賃を払おうとした。大夫は留めて、宿賃はもらわぬ、しかし金の入れてある大切な囊は預かっておこうと言った。なんでも大切な品は、宿に着けば宿の主人あるじに、舟に乗れば舟の主ぬしに預けるものだというのである。子供らの母は最初に宿を借ることを許してから、主人の大夫の言うことを聴かなくてはならぬような勢いになった。掟を破つてまで宿を貸してくれたのを、ありがたくは思つても、何事によらず言うがままになるほど、大夫を信じてはいない。こういう勢いになったのは、大夫の詞に人を押しつける強みがあつて、母親はそれに抗あらがうことが出来ぬからである。その抗うことの出来ぬのは、

どこか恐ろしいところがあるからである。しかし母親は自分が大  
夫を恐れているとは思っていない。自分の心はつきりわかつて  
いない。

母親は余儀ないことをするような心持ちで舟に乗った。子供ら  
は凪ないだ海の、青い氈かもを敷いたような面おもてを見て、物珍しさに胸を  
おどらせて乗った。ただ姥竹が顔には、きのう橋の下を立ち去つ  
たときから、今舟に乗るときまで、不安の色が消え失せなかった。  
山岡大夫は纜ともづなを解いた。さおで岸を一押し押すと、舟は揺ゆらめきつ  
つ浮び出た。

山岡大夫はしばらく岸に沿うて南へ、越中境の方角へ漕いで行く。靄は見る見る消えて、波が日にかがやく。

人家のない岩蔭に、波が砂を洗つて、海松や荒布を打ち上げているところがあつた。そこに舟が二艘止まっている。船頭が大夫を見て呼びかけた。

「どうじゃ。あるか」

大夫は右の手を挙げて、大拇を折つて見せた。そして自分もそこへ舟を舫つた。大拇だけ折つたのは、四人あるという相図である。

前からいた船頭の一人は宮崎の三郎といつて、越中宮崎のもの

である。左の手の拳こぶしを開いて見せた。右の手が貨しろものの相図あひづになるように、左の手は錢の相図になる。これは五貫文につけたのである。「氣張るぞ」と今一人の船頭が言つて、左の臂ひじをつと伸べて、一度拳を開いて見せ、ついで示ひとさしゆび指ゆびを豎たてて見せた。この男は佐渡の二郎で六貫文につけたのである。

「横おうちやくものめ着者奴」と宮崎が叫んで立ちかかれば、「出し抜こうとしたのはおぬしじゃ」と佐渡が身構えをする。二艘の舟がかしいで、舷ふなばたが水むちうを答こたつた。

大夫は二人の船頭の顔を冷ややかに見較べた。「あわてるな。どっちも空手からてでは還かえさぬ。お客さまがご窮屈でないように、お二人ずつ分けて進ぜる。賃錢はあとでつけた値段の割じゃ」こう言

つておいて、大夫は客を顧みた。「さあ、お二人ずつあの舟へお乗りなされ。どれも西国への便船じゃ。舟足というものは、重過ぎては走りが悪い」

二人の子供は宮崎が舟へ、母親と姥竹とは佐渡が舟へ、大夫が手をとつて乗り移らせた。移らせて引く大夫が手に、宮崎も佐渡も幾いくさし縹いんげんかの錢を握らせたのである。

「あの、主人あるじにお預けなされた囊ふくろは」と、姥竹しゅうそでが主の袖を引くと、山岡大夫は空舟をつと押し出した。

「わしはこれでお暇いとまをする。たしかな手からたしかな手へ渡すまでがわしの役じゃ。ご機嫌ごけんようお越しなされ」

ろの音が忙せわしく響いて、山岡大夫の舟は見る見る遠ざかつて行

く。

母親は佐渡に言った。「同じ道を漕いで行つて、同じ港に着くのでございませうね」

佐渡と宮崎とは顔を見合せて、声を立てて笑つた。そして佐渡が言った。「乗る舟は弘誓くげいの舟、着くは同じ彼岸かのきしと、蓮華峰れんげ寺ふじの和尚おしょうが言うたげな」

二人の船頭はそれきり黙つて舟を出した。佐渡の二郎は北へ漕ぐ。宮崎の三郎は南へ漕ぐ。「あれあれ」と呼びかわす親子主従は、ただ遠ざかり行くばかりである。

母親は物狂おしげに舷ふなばたに手をかけて伸び上がった。「もうしかたがない。これが別れだよ。安寿あんじゆは守本尊の地藏様を大切に

し。<sup>ずしおう</sup>厨子王はお父うさまの下さった護り刀を大切におし。どうぞ

二人が離れぬように」安寿は姉娘、厨子王は弟の名である。

子供はただ「お母あさま、お母あさま」と呼ぶばかりである。

舟と舟とは次第に遠ざかる。後ろには餌<sup>え</sup>を待つ雛<sup>ひな</sup>のように、二人の子供があいた口が見えていて、もう声は聞えない。

姥竹は佐渡の二郎に「もし船頭さん、もしもし」と声をかけていたが、佐渡は構わぬので、とうとう赤松の幹のような脚にすがつた。「船頭さん。これはどうしたことでございます。あのお嬢さま、若さまに別れて、生きてどこへ往かれましょう。奥さまも同じことでございます。これから何をたよりにお暮らしなさいませう。どうぞあの舟の往く方へ漕いで行って下さいまし。後生

でございます」

「うるさい」と佐渡は後ろざまに蹴った。姥竹は舟ふなとこに倒れた。髪は乱れて舷にかかった。

姥竹は身を起した。「ええ。これまでじゃ。奥さま、ご免下さいまし」こう言つてまつさかさまに海に飛び込んだ。

「こら」と言つて船頭は臂ひじを差し伸ばしたが、まにあわなかつた。母親は袿うちぎを脱いで佐渡が前へ出した。「これは粗末な物でございませうが、お世話になつたお礼に差し上げます。わたくしはもうこれでお暇を申します」こう言つて舷に手をかけた。

「たわけが」と、佐渡は髪をつかんで引き倒した。「うぬまで死なせてなるものか。大事な貨しろものじゃ」

佐渡の二郎は牽つなを引き出して、母親をくるくる巻きにして転がした。そして北へ北へと漕いで行つた。

「お母あさまお母あさま」と呼び続けている姉と弟とを載せて、宮崎の三郎が舟は岸に沿うて南へ走つて行く。「もう呼ぶな」と宮崎が叱つた。「水の底の鱗いろくず介には聞えても、あの女子には聞おなごえぬ。女子どもは佐渡へ渡つて粟あわの鳥でも逐おわせられることじやろう」

姉の安寿と弟の厨子王とは抱き合つて泣いている。故郷を離れ

るも、遠い旅をするも母と一しよにすることだと思つていたのに、今はからずも引き分けられて、二人はどうしていいかわからない。ただ悲しさばかりが胸にあふれて、この別れが自分たちの身の上をどれだけ変らせるか、そのほどさえ弁えられぬのである。

午ひるになつて宮崎は餅もちを出して食つた。そして安寿と厨子王とも一つずつくれた。二人は餅を手に持つて食べようともせず、目を見合せて泣いた。夜は宮崎がかぶせた苦とまの下で、泣きながら寝入つた。

こうして二人は幾日か舟に明かし暮らした。宮崎は越中、能登のと、越前えちぜん、若狭わかさの津々浦々を売り歩いたのである。

しかし二人がおさないのに、体もか弱く見えるので、なかなか

買おうと言うものがない。たまに買い手があつても、値段の相談が調ととのわない。宮崎は次第に機嫌を損じて、「いつまでも泣くか」と二人を打つようになった。

宮崎が舟は廻り廻つて、丹後の由良ゆらの港に來た。ここには石浦といふところに大きい邸やしきを構えて、田畑に米麦を植えさせ、山では獵かりをさせ、海では漁すなどりをさせ、蚕飼こがいをさせ、機織はたおりをさせ、金物、陶物すえもの、木の器、何から何まで、それぞれの職人を使つて造らせる山椒大夫さんしょうだゆうという分限者ぶんげんしやがいて、人なら幾らでも買う。宮崎はこれまでも、よそに買い手のない貨しろものがあると、山椒大夫がところへ持つて來ることになつていた。

港に出張つていた大夫の奴頭やつこがしらは、安寿、厨子王をすぐに七

貫文に買った。

「やれやれ、餓鬼<sup>がき</sup>どもを片づけて身が軽うなった」と言つて、宮崎の三郎は受け取つた錢<sup>ふところ</sup>を懐に入れた。そして波止場の酒店にはいつた。

一抱えに余る柱を立て並べて造つた大廈<sup>おおいえ</sup>の奥深い広間に一間四方の炉を切らせて、炭火がおこしてある。その向うに茵<sup>しとね</sup>を三枚畳<sup>かさ</sup>ねて敷いて、山椒大夫は几<sup>おしまずき</sup>にもたれている。左右には二郎、三郎の二人の息子が狢<sup>こまいぬ</sup>犬のように列<sup>なら</sup>んでいる。もと大夫には三人

の男子があつたが、太郎は十六歳のとき、逃亡を企てて捕えられた奴に、父が手ずから烙印やきいんをするのをじつと見ていて、一言も物を言わずに、ふいと家を出て行くえが知れなくなった。今から十九年前のことである。

奴頭やつこがしらが安寿、厨子王を連れて前へ出た。そして二人の子供に辞儀をせいと言つた。

二人の子供は奴頭の詞ことばが耳に入らぬらしく、ただ目をみはつて大夫を見ている。今年六十歳になる大夫の、朱を塗つたような顔は、額あしこが張つて、髪ひげも銀色に光っている。子供らは恐ろしいよりは不思議がつて、じつとその顔を見ているのである。

大夫は言つた。「買うて来た子供はそれか。いつも買う奴やつこと違

うて、何に使うてよいかわからぬ、珍らしい子供じやというから、わざわざ連れて来させてみれば、色の蒼あおざめた、か細わらわい童どもじや。何に使うてよいかは、わしにもわからぬ」

そばから三郎が口を出した。末の弟ではあるが、もう三十になつてゐる。「いやお父っさん。さつきから見れば、辞儀をせいと言われても辞儀もせぬ。ほかの奴のように名のりもせぬ。弱々しゆう見えてもしぶとい者どもじや。奉公初めは男しばかが柴しばか蒞り、女が汐しおく汲みときまつてゐる。その通りにさせなされい」

「おつしやるとおり、名はわたくしにも申しませぬ」と、奴頭が言つた。

大夫は嘲あざわら笑つた。「愚か者と見える。名はわしがつけてやる。

姉はいたつきを垣しのぶぐさ衣、弟は我が名を萱わすれぐさ草じや。垣衣は浜へ往つて、日に三荷がの潮を汲め。萱草は山へ往つて日に三荷の柴を刈れ。弱々しい体に免じて、荷は軽うして取らせる」

三郎が言つた。「過分のいたわりようじや。こりや、奴頭。早く連れて下がつて道具を渡してやれ」

奴頭は二人の子供を新参小屋に連れて往つて、安寿には桶おけと杓きんぎょ、厨子王には籠かごと鎌かまを渡した。どちらにも午餉ひるげを入れる櫛か子れいが添えてある。新参小屋はほかの奴婢ぬひの居所とは別になっているのである。

奴頭が出て行くころには、もうあたりが暗くなつた。この屋いえには燈火あかりもない。

翌日の朝はひどく寒かった。ゆうべは小屋に備えてある衾ふすまがあまりきたないので、厨子王が薦こもを探して来て、舟で苦とまをかずいたように、二人でかずいて寝たのである。

きのう奴頭に教えられたように、厨子王は櫛かれいけ子けを持って厨くりやへ餉かれいを受け取りに往った。屋根の上、地にちらばった藁わらの上には霜が降っている。厨は大きい土間で、もう大勢の奴婢ぬひが来て待つている。男と女とは受け取る場所が違うのに、厨子王は姉のとも自分

のともらおうとするので、一度は叱られたが、あすからはめいめ

いともらいに来ると誓つて、ようよう櫛かたかゆ子まりのほかに、面桶めんつうに入れたと、木の椀まりに入れた湯との二人前をも受け取つた。は塩を入れて炊かしいである。

姉と弟とは朝餉あさげを食べながら、もうこうした身の上になつては、運命のもとに項うなじを屈かがめるよりほかはないと、けなげにも相談した。そして姉は浜辺へ、弟は山路をさして行くのである。大夫が邸の三の木戸、二の木戸、一の木戸を一しよに出て、二人は霜を履ふんで、見返りがちに左右へ別れた。

厨子王が登る山は由良ゆらが嶽たけの裾すそで、石浦からは少し南へ行つて登るのである。柴を苜ふもとる所は、麓ふもとから遠くはない。ところどころ紫色の岩の露あわれている所を通つて、やや広い平地に出る。そこ

に雑木が茂っているのである。

厨子王は雑木林の中に立ってあたりを見廻した。しかし柴はどうして苳るものかと、しばらくは手を着けかねて、朝日に霜の融とけかかる、茵しとねのような落ち葉の上に、ぼんやりすわって時を過した。ようよう気を取り直して、一枝二枝苳るうちに、厨子王は指を傷いためた。そこでまた落ち葉の上にすわって、山でさえこんな寒い、浜辺に行った姉さまは、さぞ潮風が寒かろうと、ひとり涙をこぼしていた。

日がよほど昇ってから、柴を背負って麓へ降りる、ほかの樵きこりが通りかかって、「お前も大夫のところの奴か、柴は日に何苳るのか」と問うた。

「日に三荷苳るはずの柴を、まだ少しも苳りませぬ」と厨子王は正直に言つた。

「日に三荷の柴ならば、午<sup>ひる</sup>までに二荷苳るがいい。柴はこうして苳るものじゃ」樵は我が荷をおろして置いて、すぐに一荷苳つてくれた。

厨子王は氣を取り直して、ようよう午までに一荷苳り、午からまた一荷苳つた。

浜辺に往く姉の安寿は、川の岸を北へ行つた。さて潮を汲む場所に降り立つたが、これも汐の汲みようを知らない。心で心を励まして、ようよう<sup>ひさいし</sup>杓をおろすや否や、波が杓を取つて行つた。

隣で汲んでいる女子<sup>おなご</sup>が、手早く杓を拾つて戻した。そしてこう

言つた。「汐はそれでは汲まれません。どれ汲みようを教えて上げよう。右手めての杓すくでこう汲んで、左手ゆんでの桶おけでこう受ける」とうとう一荷汲んでくれた。

「ありがとうございます。汲みようが、あなたのお蔭で、わかつたようでございます。自分で少し汲んでみましょう」安寿は汐を汲み覚えた。

隣で汲んでいる女子に、無邪気な安寿が気に入つた。二人は午ひ餉るげを食べながら、身の上を打ち明けて、姉きょうだい妹まいの誓いをした。これは伊勢の小萩こはぎといつて、二見が浦から買われて来た女子である。

最初の日はこの工合に、姉が言いつけられた三荷の潮も、弟

が言いつけられた三荷の柴も、一荷ずつの勧進を受けて、日の暮れまでに首尾よく調ととのつた。

姉は潮を汲み、弟は柴を茹ひつて、一日一日と暮らして行つた。

姉は浜で弟を思い、弟は山で姉を思い、日の暮れを待つて小屋に帰れば、二人は手を取り合つて、筑紫にいる父が恋しい、佐渡にいる母が恋しいと、言つては泣き、泣いては言う。

とかくするうちに十日立つた。そして新参小屋を明けなくてはならぬときが来た。小屋を明ければ、奴やつこは奴はしため、婢は婢の組に入る

のである。

二人は死んでも別れぬと言った。奴頭が大夫に訴えた。

大夫は言った。「たわけた話じゃ。奴は奴の組へ引きずって往け。婢は婢の組へ引きずって往け」

奴頭が承つて起とうとしたとき、二郎がかたわらから呼び止めた。そして父に言った。「おつしやる通りに童どもを引わらべき分けさせてもよろしゅうございますが、童どもは死んでも別れぬと申すそうでございます。愚かなものゆえ、死ぬるかも知れません。苧る柴はわずかでも、汲む潮はいささかでも、人手を耗へらすのは損でございます。わたくしがいいように計らつてやりましょう」

「それもそうか。損になることはわしも嫌いじゃ。どうにでも勝

手にしておけ」大夫はこう言つて脇へ向いた。

二郎は三の木戸に小屋を掛けさせて、姉と弟とを一しよに置いた。

ある日の暮れに二人の子供は、いつものように父母のことを言つていた。それを二郎が通りかかつて聞いた。二郎は邸を見廻つて、強い奴が弱い奴をしえた虐げたり、いさか諍いをしたり、盗みをしたりするのを取り締まつているのである。

二郎は小屋にはいつて二人に言つた。「父母は恋しゆうても佐渡は遠い。筑紫はそれよりまた遠い。子供の往かれる所ではない。父母に逢いたいなら、大きゆうなる日を待つがよい」こう言つて出て行つた。

ほど経てまたある日の暮れに、二人の子供は父母のことを言っていた。それを今度は三郎が通りかかって聞いた。三郎は寝鳥を取ることが好きで邸のうちの木立ち木立ちを、手に弓矢を持って見廻るのである。

二人は父母のことを言うたびに、どうしようか、どうしようかと、逢いたさのあまりに、あらゆる手立てを話し合つて、夢のよくな相談をもする。きようは姉がこう言った。「大きくなつてからでなくては、遠い旅が出来ないというのは、それは当り前のことよ。わたしたちはその出来ないことがしたいのだから。だがわたしよく思つてみると、どうしても二人一しよにここを逃げ出しては駄目なの。わたしには構わないで、お前一人で逃げなくては。」

そしてさきへ筑紫の方へ往つて、お父うさまにお目にかかつて、  
どうしたらいいか伺うのだね。それから佐渡へお母さまのお迎え  
に往くがいいわ」三郎が立聞きをしたのは、あいにくこの安寿の  
詞ことばであつた。

三郎は弓矢を持って、つと小屋のうちにはいった。

「こら。お主ぬしたちは逃げる談合をしておるな。逃亡の企てをした  
ものには烙やきいん印をする。それがこの邸の掟じや。赤うなつた鉄は  
熱いぞよ。」

二人の子供は真まつ蒼さおになつた。安寿は三郎が前に進み出て言つ  
た。「あれは謏うそでございます。弟が一人で逃げたつて、まあ、ど  
こまで往かれましょう。あまり親に逢いたいので、あんなことを

申しました。こないだも弟と一しよに、鳥になって飛んで往こうと申したこともございます。出放題でございます」

厨子王は言った。「姉えさんの言う通りです。いつでも二人で今のような、出来ないことばかり言つて、父母の恋しいのを紛らまぎしているのです」

三郎は二人の顔を見較べて、しばらくの間黙っていた。「ふん。嘘なら嘘でもいい。お主たちが一しよにおつて、なんの話をするということを、おれがたしかに聞いておいたぞ」こう言つて三郎は出て行つた。

その晩は二人が気味悪く思いながら寝た。それからどれだけ寝たかわからない。二人はふと物音を聞きつけて目をさました。今

の小屋に来てからは、燈火ともしびを置くことが許されている。そのかすかな明りで見れば、枕もとに三郎が立っている。三郎は、つと寄つて、両手で二人の手をつかまえる。そして引き立てて戸口を出る。蒼ざめた月を仰ぎながら、二人は目見えのときに通つた、広い馬道めどうを引かれて行く。階はしを三段登る。廊ほそどのを通る。廻り廻つてさきの日に見た広間にはいる。そこには大勢の人が黙つて並んでいる。三郎は二人を炭火の真つ赤におこつた炉の前まで引きずつて出る。二人は小屋で引き立てられたときから、ただ「ご免なさいご免なさい」と言っていたが、三郎は黙つて引きずつて行くので、しまいには二人も黙つてしまった。炉の向い側には茵しとね三枚を畳かきねて敷いて、山椒大夫がすわっている。大夫の赤顔が、座の右

左に焚たいてある 炬たてあかし 火あかしを照り反して、燃えるようである。三郎は炭火の中から、赤く焼けている火ひばしを抜き出す。それを手に持つて、しばらく見ている。初め透き通るように赤くなつていた鉄が、次第に黒ずんで来る。そこで三郎は安寿を引き寄せて、火を顔に当てようとする。厨子王はその肘ひじにからみつく。三郎はそれを蹴倒けたおして右の膝ひざに敷く。とうとう火を安寿の額に十文字に当てる。安寿の悲鳴が一座の沈黙を破つて響き渡る。三郎は安寿を衝き放して、膝の下の厨子王を引き起し、その額にも火を十文字に当てる。新たに響く厨子王の泣き声が、ややかすかになつた姉の声に交じる。三郎は火を棄てて、初め二人をこの広間へ連れて来たときのように、また二人の手をつかまえる。そして一

座を見渡したのち、広い母屋おもやを廻つて、二人を三段の階はしの所まで引き出し、凍こおつた土の上に衝き落す。二人の子供は創きずの痛みと心の恐れとに氣を失いそうになるのを、ようよう堪え忍んで、どこをどう歩いたともなく、三の木戸の小家こやに帰る。臥所ふしどの上に倒れた二人は、しばらく死骸しがいのように動かずにいたが、たちまち厨子王が「姉えさん、早くお地藏様を」と叫んだ。安寿はすぐに起き直つて、肌はだの守まもり袋ぶくろを取り出した。わななく手に紐ひもを解いて、袋から出した仏像を枕もとに据すえた。二人は右左にぬかずいた。そのとき齒をくいしばつてもこらえられぬ額の痛みが、搔き消すように失せた。掌てのひらで額を撫なでてみれば、創は痕もなくなつた。はつと思つて、二人は目をさました。

二人の子供は起き直つて夢の話をした。同じ夢を同じときに見たのである。安寿は守本尊を取り出して、夢で据えたと同じように、枕もとに据えた。二人はそれを伏し拜んで、かすかな燈火ともしびの明りにすかして、地藏尊の額を見た。白毫びやくごうの右左に、鑿たがねで彫つたような十文字の疵きずがあざやかに見えた。

二人の子供が話を三郎に立聞きせられて、その晩恐ろしい夢を見たときから、安寿の様子がひどく變つて来た。顔には引き締まつたような表情があつて、眉まゆの根には皺しわが寄り、目ははるかに遠

いところを見つめている。そして物を言わない。日の暮れに浜から帰ると、これまでは弟の山から帰るのを待ち受けて、長い話をしたのに、今はこんなときにも詞ことば少なすくにしている。厨子王が心配して、「姉えさんどうしたのです」と言うと「どうもしないの、大丈夫よ」と言つて、わぎとらしく笑う。

安寿の前と変つたのはただこれだけで、言うことが間違つてもおらず、することも平へい生せいの通りである。しかし厨子王は互いに慰めもし、慰められもした一人の姉が、変つた様子をするのを見て、際限なくつらく思う心を、誰に打ち明けて話すことも出来ない。二人の子供の境きょう界がいは、前より一層寂しくなつたのである。雪が降つたり歇やんだりして、年が暮れかかった。奴やつこも婢はしためも外に

出る為事しごとを止めて、家の中で働くことになった。安寿は糸を紡ぐつむ。厨子王は藁わらを擣うつ。藁わらを擣うつのは修行はいらぬが、糸を紡ぐのはむずかしい。それを夜になると伊勢の小萩が来て、手伝ったり教えたりする。安寿は弟に対する様子が変ったばかりでなく、小萩に対しては詞少なになつて、ややもすると不愛想をする。しかし小萩は機嫌を損せず、いたわるようにしてつきあつてゐる。

山椒大夫が邸の木戸にも松が立てられた。しかしここの年のはじめは何の晴れがましいこともなく、また族うからうの女子おなごたちは奥深く住んでいて、出入りすることがまれなので、賑にぎわしいこともない。ただ上かみも下しもも酒を飲んで、奴の小屋には諍いさかいが起るだけである。常は諍いさかいをする、きびしく罰せられるのに、こういうときは奴

頭が大目に見る。血を流しても知らぬ顔をしていることがある。どうかすると、殺されたものがあつても構わぬのである。

寂しい三の木戸の小屋へは、折り折り小萩が遊びに来た。婢の小屋の賑わしさを持つて来たかと思うように、小萩が話している間は、陰気な小屋も春めいて、このごろ様子の変っている安寿の顔にさえ、めつたに見えぬ微笑みの影が浮ぶ。

三日立つと、また家の中の為事が始まった。安寿は糸を紡ぐ。

厨子王は藁を掃つ。もう夜になつて小萩が来ても、手伝うにおよばぬほど、安寿は紡錘つむむを廻すことに慣れた。様子は変つていても、こんな静かな、同じことを繰り返すような為事をするには差支さしつかえなく、また為事がかえつて一向ひとむきになつた心を散らし、落ち着

きを与えるらしく見えた。姉と前のように話をすることの出来ぬ  
厨子王は、紡いでいる姉に、小萩がいて物を言ってくれるのが、  
何よりも心強く思われた。

水が温<sup>ぬる</sup>み、草が萌<sup>も</sup>えるころになった。あすからは外の為事が始  
まるといふ日に、二郎が邸を見廻るついでに、三の木戸の小屋に  
来た。「どうじゃな。あす為事に出られるかな。大勢の人のうち  
には病気でおるものもある。奴頭の話聞いたばかりではわから  
ぬから、きようは小屋小屋を皆見て廻ったのじゃ」

藁を擣っていた厨子王が返事をしようとして、まだ詞を出さぬ間に、このごろの様子にも似ず、安寿が糸を紡ぐ手を止めて、つと二郎の前に進み出た。「それについてお願いがございます。わたくしは弟と同じ所で為事がいたしとうございます。どうか一よに山へやって下さるようによ、お取り計らいなすって下さいまし」蒼ざめた顔に紅くれないがさして、目がかがやいている。

厨子王は姉の様子が二度目に変つたらしく見えるのに驚き、また自分になんの相談もせずについて、突然柴苳りに往きたいと言うのをいぶかも訝しがって、ただ目をみはって姉をまもっている。

二郎は物を言わずに、安寿の様子をじつと見ている。安寿は「ほかにない、ただ一つのお願いでございます、どうぞ山へおや

りなすつて」と繰り返して言っている。

しばらくして二郎は口を開いた。「この邸では奴婢ぬひのなにがしに  
なんの為事をさせるといふことは、重いことにしてあつて、父が  
みずからきめる。しかし垣しのぶくさ衣、お前の願いはよくよく思い込  
んでのことと見える。わしが受け合つて取りなして、きつと山へ  
往かれるようにしてやる。安心しているがいい。まあ、二人のお  
さないものが無事に冬を過してよかつた」こう言つて小屋を出た。  
厨子王は杵きねを置いて姉のそばに寄つた。「姉えさん。どうした  
のです。それはあなたが一しよに山へ来て下さるのは、わたしも  
嬉しいが、なぜ出し抜けに頼んだのです。なぜわたしに相談しま  
せん」

姉の顔は喜びにかがやいている。「ほんにそうお思いのはもつともだが、わたしだつてあの人の顔を見るまで、頼もうとは思つていなかったの。ふいと思いついたのだもの」

「そうですか。変ですなあ」厨子王は珍らしい物を見るように姉の顔を眺めている。

奴頭が籠と鎌とを持つてはいつて来た。「垣しのぶくさ衣さん。お前

に汐汲みをよさせて、柴を苅りにやるのだそうで、わしは道具を持つて来た。代りに桶ひさしと杓ひさしをもらつて往こう」

「これはどうもお手数てかずでございました」安寿は身軽に立つて、桶と杓とを出して返した。

奴頭はそれを受け取つたが、まだ帰りそうにはしない。顔には

一種の苦笑にがわらいのような表情が現われている。この男は山椒大夫いっけ一家のものの言いつけを、神の託宣を聴くように聴く。そこで随分情けない、苛酷かこくなことをもためらわずにする。しかし生しょうとく得、人の悶もだえ苦しんだり、泣き叫んだりするのを見たがりはしない。物事がおだやかに運んで、そんなことを見ずに済めば、その方が勝手である。今の苦笑いのような表情は人に難儀をかけずには済まぬとあきらめて、何か言ったり、したりするとき、この男の顔に現われるのである。

奴頭は安寿に向いて言った。「さて今一つ用事があるて。実はお前さんを柴蒔りにやることは、二郎様が大夫様に申し上げて拵こしらえなさったのじゃ。するとその座に三郎様がおられて、そんなら

垣衣を おおわらわ 大童にして山へやれとおつしやつた。大夫様は、よい  
思いつきじやお笑いなされた。そこでわしはお前さんの髪をも  
ろうて往かねばならぬ」

そばで聞いている厨子王は、この詞を胸を刺されるような思い  
をして聞いた。そして目に涙を浮べて姉を見た。

意外にも安寿の顔からは喜びの色が消えなかつた。「ほんにそ  
うじゃ。柴苳りに往くからは、わたしも男じゃ。どうぞこの鎌で  
切つて下さいまし」安寿は奴頭の前に項うなじを伸ばした。

光沢つやのある、長い安寿の髪が、鋭い鎌の一搔ひとかきにさつくり切れ  
た。

あくる朝、二人の子供は背に籠を負い腰に鎌を挿して、手を引き合つて木戸を出た。山椒大夫のところに来てから、二人一しよに歩くのはこれがはじめである。

厨子王は姉の心を忖<sup>はか</sup>りかねて、寂しいような、悲しいような思いに胸が一ぱいになっている。きのうも奴頭の帰つたあとで、いろいろに詞を設けて尋ねたが、姉はひとりで何事かを考えているらしく、それをあからさまには打ち明けずにしまった。

山の麓に来たとき、厨子王はこらえかねて言った。「姉えさん。わたしはこうして久しぶりで一しよに歩くのだから、嬉しがらな

くてはならないのですが、どうも悲しくてなりません。わたしはこうして手を引いていながら、あなたの方へ向いて、その禿かぶろになったお頭つむりを見ることが出来ません。姉えさん。あなたはわたしに隠して、何か考えていますね。なぜそれをわたしに言つて聞かせてくれないのです」

安寿はけさも毫ごうこう光のさすような喜びを額にたたえて、大きい目をかがやかしている。しかし弟の詞には答えない。ただ引き合っている手に力を入れただけである。

山に登ろうとする所に沼がある。みぎわ汀には去年見たときのように、枯れ葦あしが縦横に乱れているが、道端の草には黄ばんだ葉の間に、もう青い芽の出たのがある。沼の畔ほとりから右に折れて登ると、そこ

に岩の隙間すきまから清水の湧く所がある。そこを通り過ぎて、岩壁を右に見つつ、うねった道を登って行くのである。

ちょうど岩おもての面に朝日が一面にさしている。安寿は畳かさなり合つた岩の、風化した間に根をおろして、小さい堇すみれの咲いているのを見つけた。そしてそれを指さして厨子王に見せて言った。「ごらん。もう春になるのね」

厨子王は黙つてうなずいた。姉は胸に秘密を蓄たくわえ、弟は憂えばかりを抱いているので、とかく受け応えが出来ずに、話は水が砂しに沁み込むようにとぎれてしまう。

去年柴を刈つた木立ちのほとりに来たので、厨子王は足を駐とどめた。「ねえさん。ここらで刈るのです」

「まあ、もつと高い所へ登ってみましようね」安寿は先に立つて  
ずんずん登つて行く。厨子王は訝いぶかりながらついて行く。しばらく  
して雑木林よりはよほど高い、外山とやまの頂とも言ふべき所に来た。

安寿はそこに立つて、南の方をじつと見ている。目は、石浦を  
経て由良の港に注ぐ大雲川の上流をたどつて、一里ばかり隔つた  
川向いに、こんもりと茂つた木立ちの中から、塔さいぎの尖の見える中  
山に止まつた。そして「厨子王や」と弟を呼びかけた。「わたし  
が久しい前から考えごとをしていて、お前ともいつものように話  
をしないのを、変だと思つていたでしょうね。もうきようは柴な  
んぞは茹らなくてもいいから、わたしの言うことをよくお聞き。  
小萩は伊勢から売られて来たので、故郷からこの土地までの道を、

わたしに話して聞かせたがね、あの中山を越して往けば、都がもう近いのだよ。筑紫へ往くのはむずかしいし、引き返して佐渡へ渡るのも、たやすいことではないけれど、都へはきつと往かれま  
す。お母あさまとご一しよに岩代を出てから、わたしどもは恐ろしい人にばかり出逢ったが、人の運が開けるものなら、よい人に出逢わぬにも限りません。お前はこれから思いきつて、この土地を逃げ延びて、どうぞ都へ登っておくれ。神かみほとけ 仏のお導きで、よい人にさえ出逢ったら、筑紫へお下りになつたお父うさまのお身の上も知れよう。佐渡へお母あさまのお迎えに往くことも出来よう。籠や鎌は棄てておいて、標かれいけ子こだけ持って往くのだよ」

厨子王は黙って聞いていたが、涙が頬ほおを伝って流れて来た。

「そして、姉えさん、あなたはどうしようというのです」

「わたしのことは構わないで、お前一人であることを、わたしと一しよにするつもりでしておくれ。お父うさまにもお目にかかり、お母あさまをも島からお連れ申した上で、わたしをたすけに来ておくれ」

「でもわたしがいなくなったら、あなたをひどい目に逢わせまいよう」厨子王が心には烙やきいん印をせられた、恐ろしい夢が浮ぶ。

「それははじめめるかも知れないがね、わたしは我慢して見せます。金で買った婢はしためをあの人たちは殺しはしません。多分お前がいなくなったら、わたしを二人前働かせようとするでしょう。お前の教えてくれた木立ちの所で、わたしは柴をたくさん苅ります。六荷

までは苅れないでも、四荷でも五荷でも苅りましょう。さあ、あそこまで降りて行って、籠や鎌をあそこに置いて、お前を麓へ送って上げよう」こう言つて安寿は先に立つて降りて行く。

厨子王はなんとも思い定めかねて、ぼんやりしてついて降りる。姉は今年十五になり、弟は十三になつてゐるが、女は早くおとなびて、その上物に憑つかれたように、聡さとく賢さかしくなつてゐるので、厨子王は姉の詞にそむくことが出来ぬのである。

木立ちの所まで降りて、二人は籠と鎌とを落ち葉の上に置いた。姉は守本尊を取り出して、それを弟の手に渡した。「これは大事なお守だが、こんど逢うまでお前に預けます。この地藏様をわたしだと思つて、護り刀と一しよにして、大事に持つていておくれ」

「でも姉えさんにお守がなくては」

「いいえ。わたしよりはあぶない目に逢うお前にお守を預けます。晩にお前が帰らないと、きつと討手うってがかかります。お前がいくら急いでも、あたり前に逃げて行つては、追いつかれるにきまつています。さつき見た川の上手かみてを和江わえという所まで往つて、首尾よく人に見つけられずに、向う河岸へ越してしまえば、中山までもう近い。そこへ往つたら、あの塔の見えていたお寺にはいつて隠しておもらい。しばらくあそこに隠れていて、討手が帰つて来たあとで、寺を逃げておいで」

「でもお寺の坊さんが隠しておいてくれるでしょうか」

「さあ、それが運うんだめ験だめしだよ。開ける運なら坊さんがお前を隠し

てくれましょう」

「そうですね。姉えさんのきようおつしやることは、まるで神様か仏様がおつしやるようです。わたしは考えをきめました。なんでも姉えさんのおつしやる通りにします」

「おう、よく聴いておくれだ。坊さんはよい人で、きつとお前を隠してくれませう」

「そうです。わたしにもそうらしく思われて来ました。逃げて都へも往かれます。お父うさまやお母あさまにも逢われます。姉えさんのお迎えにも来られます」厨子王の目が姉と同じようにかがやいて来た。

「さあ、麓まで一しよに行くから、早くおいで」

二人は急いで山を降りた。足の運びも前とは違つて、姉の熱した心持ちが、暗示のように弟に移つて行つたかと思われる。

泉の湧く所へ来た。姉は櫛か子いけに添えてある木の椀まりを出して、清水を汲んだ。「これがお前の門出かどでを祝うお酒だよ」こう言つて一口飲んで弟にさした。

弟は椀まりを飲み干した。「そんなら姉えさん、ご機嫌よう。きつと人に見つからずに、中山まで参ります」

厨子王は十歩ばかり残つていた坂道を、一走りに駆け降りて、沼に沿うて街道に出た。そして大雲川の岸を上手へ向かつて急ぐのである。

安寿は泉の畔ほとりに立つて、並木の松に隠れてはまた現われる後ろ

影を小さくなるまで見送った。そして日はようやく午ひるに近づくのに、山に登ろうともしない。幸いにきようはこの方角の山で木を樵こる人がないと見えて、坂道に立って時を過す安寿を見とがめるものもなかつた。

のちに同胞はらからを捜しに出た、山椒大夫一家の討手が、この坂の下したの沼はたの端はたで、小さい藁履わらぐつを一足そく拾った。それは安寿の履くつであつた。

中山こくぶじの国分寺こくぶじの三門さんもんに、松明たいまつの火影たいまつが乱れて、大勢たいせいの人が籠こ

み入つて来る。先に立つたのは、白柄しらつかの薙刀なぎなたを手挾たはさんだ、山椒大夫の息子三郎である。

三郎は堂の前に立つて大声に言った。「これへ参つたのは、石浦の山椒大夫が族うからのものじゃ。大夫が使う奴やつこの一人が、この山に逃げ込んだのを、たしかに認めたものがある。隠れ場は寺内よりほかにはない。すぐにここへ出してもらおう」ついて来た大勢が、「さあ、出してもらおう、出してもらおう」と叫んだ。

本堂の前から門の外まで、広い石畳が続いている。その石の上には、今手に手に松明を持った、三郎が手のものが押し合っている。また石畳の両側には、境内に住んでいる限りの僧俗が、ほとんど一人も残らず簇むらがっている。これは討手の群れが門外で騒いだ

とき、内陣からも、庫裡くりからも、何事が起つたかと、怪しんで出て来たのである。

初め討手が門外から門をあけいと叫んだとき、あけて入れたら、乱暴をせられはすまいかと心配して、あけまいとした僧侶が多かつた。それを住持曇どん猛みょう律師りつしがあげさせた。しかし今三郎が大声で、逃げた奴を出せと言うのに、本堂は戸を閉じたまま、しばらくの間ひっそりとしている。

三郎は足踏みをして、同じことを二三度繰り返した。手のものうちから「和尚さん、どうしたのだ」と呼ぶものがある。それに短い笑い声が交じる。

ようようのことで本堂の戸が静かにあいた。曇猛律師が自分で

あけたのである。律師は偏へん衫さん一つ身にまとつて、なんの威儀ゐぎも繕つくろわず、常燈明の薄明りを背にして本堂の階はしの上に立つた。丈たけの高い巖がん躰じようと、眉のまだ黒い廉張かどばった顔とが、揺ゆらめく火に照らし出された。律師はまだ五十歳を越したばかりである。

律師はしずかに口を開いた。騒がしい討手のものも、律師の姿を見ただけで黙つたので、声は隅々まで聞えた。「逃げた下人げにんを捜しに來られたのじやな。当山では住持のわしに言わずに人は留めぬ。わしが知らぬから、そのものは当山にいぬ。それはそれとして、夜陰に劍戟けんげきを執とつて、多人数押し寄せて參られ、三門を開けと言われた。さては国に大乱でも起つたか、公おおやけの叛逆はんぎやく人にんでも出來たかと思つて、三門をあけさせた。それになんじや。御お

身みが家の下人の詮議せんぎか。当山は勅願の寺院で、三門には勅額をか  
 け、七重の塔には宸翰しんかん金字こんじの経文おきが蔵おさめてある。ここで狼藉ろうぜき  
 を働はたらかれると、国くに守のかみは検けん校ぎょうの責せめを問とわれるのじや。ま  
 た総本山東大寺に訴うえたら、都みやこからどのような御沙汰ごさたがあろうも  
 知れぬ。そこをよう思うてみて、早はやう引き取とられたがよかろう。  
 悪いことは言いわぬ。お身みたちのためじや」こう言いつて律師りしんはし  
 ずかに戸かどを締しめた。

三郎は本堂の戸かどを睨にらんで齒は咬がみをした。しかし戸かどを打うち破やぶつて  
 踏ふみ込こむだけの勇氣いきもなかつた。手てのものどもはただ風かぜに木きの葉は  
 のざわつくようにささやきかわしている。

このとき大声おほこゑで叫こゑぶものがあつた。「その逃にげたというのは十

二三の小わっぱはじやろう。それならわしが知っておる」

三郎は驚いて声の主ぬしを見た。父の山椒大夫に見まごうような親お爺やじで、この寺の鐘楼しゅうろう守もりである。親爺は詞つを続いで言った。「そのわっぱはな、わしが午ひるごろ鐘楼から見ておると、築泥ついでの外を通つて南へ急いだ。かよわい代りには身が軽い。もう大分の道を行つたじやろ」

「それじや。半日に童の行く道は知れたものじや。続け」と言つて三郎は取つて返した。

松たいまつ明の行列が寺の門を出て、築泥ついでの外を南へ行くのを、鐘楼守は鐘楼から見て、大声で笑つた。近い木立ちの中で、ようよう落ち着いて寝ようとした鴉からすが二三羽また驚いて飛び立った。

あくる日に国分寺からは諸方へ人が出た。石浦に往つたものは、安寿のじゆすい入水のことを聞いて来た。南の方へ往つたものは、三郎の率いた討手が田辺まで往つて引き返したことを聞いて来た。

中二日おいて、曇猛律師が田辺の方へ向いて寺を出た。たらい盥ほどある鉄の受糧器を持って、腕の太さのしゃくじよう錫杖を衝いている。あとかからは頭を剃りこくつて三衣えを着たずしお厨子王がついて行く。

二人は真昼に街道を歩いて、夜は所々の寺に泊つた。山城の朱し雀野ゆじやくのに来て、律師は権現堂に休んで、厨子王に別れた。「守本

尊を大切にして往け。父母の消息はきつと知れる」と言い聞かせて、律師は踵くびすめぐらを旋くした。亡くなつた姉と同じことを言う坊様だと、厨子王は思つた。

都に上つた厨子王は、僧そうぎよう形ぎようになつていたので、東山の清きよみ水みづ寺でらに泊とどつた。

籠こもりどう堂どうに寝て、あくる朝目がさめると、直衣のうしに烏帽子えぼしを着て指貫さしぬきをはいた老人が、枕もとに立たつていて言いつた。「お前は誰の子じゃ。何か大切な物を持つてゐるなら、どうぞおれに見せてくれい。おれは娘の病氣へいゆの平癒へいゆを祈いのるために、ゆうべここに参さんろ籠ろうした。すると夢にお告つげがあつた。左の格子こうしに寝ねてゐる童わらわがよい守本尊しほんそんを持つてゐる。それを借りて拝をませいということじゃ。

けさ左の格子に来てみれば、お前がいる。どうぞおれに身の上を明かして、守本尊を貸してくれい。おれは関白師もろざね実じゃ」

厨子王は言った。「わたくしはむつのじょうまさうじ陸奥掾正氏というものの子

でございます。父は十二年前に筑紫の安楽寺へ往ったきり、帰らぬそうでございます。母はその年に生まれたわたくしと、三つになる姉とを連れて、岩代の信夫郡しのぶごおりに住むことになりました。そのうちわたくしが大ぶ大きくなったので、姉とわたくしとを連れて、父を尋ねに旅立ちました。越後まで出ますと、恐ろしい人買いに取られて、母は佐渡へ、姉とわたくしとは丹後の由良へ売られました。姉は由良で亡くなりました。わたくしの持っている守本尊はこの地藏様でございます」こう言つて守本尊を出して見せ

た。

師実は仏像を手を取つて、まず額に当てるようにして礼をした。それから面背めんばいを打ち返し打ち返し、丁寧に見て言つた。「これはかねて聞きおよんだ、尊いほうこうおうじぞうぼさつ放光王地蔵菩薩の金像こんぞうじゃ。百くだらのくに濟国から渡つたのを、高見王が持仏にしておいでなされた。これをもち伝えておるからは、お前の家柄まぎに紛れはない。仙洞せんとうがまだ御位みくらいにおらせられた永保えいほうの初めに、国守いきやくの違格いぎやくに連座して、筑紫へ左遷せられた平正たいらのまさうじ氏が嫡子ずりように相違あるまい。もし還俗げんぞくの望みがあるなら、追つては受領ずりようの御沙汰もあろう。まず当分はおれの家の客にする。おれと一しよに館やかたへ来い」

関白師実の娘といったのは、仙洞にかしずいている養女で、実  
 は妻の姪めいである。この后きさきは久しい間病気でいられたのに、厨子王  
 の守本尊を借りて拝むと、すぐに拭ぬぐうように本復ほんぶくせられた。

師実たたくしよは厨子王しやめんじように還俗させて、自分で冠かんむりを加えた。同時に正氏が  
 謫所たたくしよへ、赦免状しやめんじようを持たせて、安否を問いに使いをやつた。  
 しかしこの使いが往つたとき、正氏はもう死んでいた。元服して  
 正道と名のつている厨子王は、身のやつれるほど歎なげいた。

その年の秋の除目じもくに正道は丹後の国守にせられた。これは遙ようじ  
 授ゆの官で、任国には自分で往かずに、掾じようをおいて治めさせるの

である。しかし国守は最初の政まつりごととして、丹後一国で人の売り買いを禁じた。そこで山椒大夫もことごとく奴婢を解放して、給料を払うことにした。大夫が家では一時それを大きい損失のように思ったが、このときから農作も工匠たくみの業も前に増して盛んになって、一族はいよいよ富み栄えた。国守の恩人曇猛律師は僧都そうずにせられ、国守の姉をいたわった小菘は故郷へ還かえされた。安寿が亡きあとにはねんごろに弔とむらわれ、また入水した沼の畔ほとりには尼寺が立つことになった。

正道は任国のためにこれだけのことをしておいて、特に仮寧けにようを申し請うて、微行して佐渡へ渡った。

佐渡の国府こふは雑太さわたという所にある。正道はそこへ往つて、役人

の手で国中を調べてもらつたが、母の行くえは容易に知れなかつた。

ある日正道は思案にくれながら、一人旅館を出て市中を歩いた。そのうちいつか人家の立ち並んだ所を離れて、畑中の道にかかった。空はよく晴れて日があかあかと照っている。正道は心のうちに、「どうしてお母あさまの行くえが知れないのだろう、もし役人なんぞに任せて調べさせて、自分が捜し歩かぬのを神仏が憎んで逢わせて下さらないのではあるまいか」などと思ひながら歩いている。ふと見れば、大ぶ大きい百姓家がある。家の南側のまばらな生垣いけがきのうちが、土をたたき固めた広場になつていて、その上に一面に蓆むしろが敷いてある。蓆には刈り取つた粟あわの穂が干してあ

る。その真ん中に、襪はくを着た女がすわって、手に長い竿さおを持つて、雀つばの来て啄いばむのを逐おつてゐる。女は何やら歌のような調子でつぶやく。

正道はなぜか知らず、この女に心が牽ひかれて、立ち止まつてのぞいた。女の乱れた髪は塵ちりに塗まみれている。顔を見れば盲めしいである。正道はひどく哀れに思った。そのうち女のつぶやいている詞が、次第に耳に慣れて聞き分けられて来た。それと同時に正道は瘡おこり病やみのように身うちが震ふるつて、目には涙が湧いて来た。女はこういう詞を繰り返してつぶやいていたのである。

安寿恋しや、ほうやれほ。

厨子王恋しや、ほうやれほ。

鳥しやうも生あるものなれば、

疾とう疾とう逃げよ、逐おわずとも。

正道はうっとりとなつて、この詞に聞き惚ほれた。そのうち臟腑ぞうふが煮え返るようになって、獸けものめいた叫びが口から出ようとするのを、齒を食いしばつてこらえた。たちまち正道は縛られた繩が解けたように垣のうちへ駆け込んだ。そして足には粟の穂を踏み散らしつつ、女の前に俯伏うつふした。右の手には守本尊を捧げ持つて、俯伏したときに、それを額に押し当てていた。

女は雀でない、大きいものが粟をあらしに來たのを知つた。そしていつもの詞を唱えやめて、見えぬ目でじつと前を見た。そのとき干した貝が水にほとびるように、両方の目に潤うるいが出た。女

は目があいた。

「厨子王」という叫びが女の口から出た。二人はぴったり抱き合  
つた。

大正四年一月

# 青空文庫情報

底本：「日本の文学 3 森鷗外（二）」中央公論社

1972（昭和47）年10月20日発行

入力：真先芳秋

校正：野口英司

1998年7月21日公開

2006年5月16日修正

青空文庫作成ファイル：

このファイルは、インターネットの図書館、青空文庫 (<http://www.aozora.gr.jp/>)

で作られました。入力、校正、制作にあたった

のは、ボランティアの皆さんです。

# 山椒大夫

森鷗外

2020年 7月13日 初版

## 奥付

発行 青空文庫

URL <http://www.aozora.gr.jp/>

E-Mail [info@aozora.gr.jp](mailto:info@aozora.gr.jp)

作成 青空ヘルパー 赤鬼@BFSU

URL <http://aozora.xisang.top/>

BiliBili <https://space.bilibili.com/10060483>

Special Thanks

青空文庫 威沙

青空文庫を全デバイスで楽しめる青空ヘルパー <http://aohelp.club/>  
※この本の作成には文庫本作成ツール『威沙』を使用しています。  
<http://tokimi.sylphid.jp/>